

31 月 We are

伝統と新時代の狭間で苦しみながら、多くの非レギュラー組が部活を支えた

過渡期の主将として

加藤謙作

昭和53年、私が中一の新入部員として入部した時のサッカー部は、名実ともに強かった。小学生の頃から当時のクラブチーム（の走り）でサッカーをやってきた私としては、入学時からサッカー部に入部するつもりであつたが、近所の先輩（28期）からは「うちのサッカー部は強豪で人数も多く、サッカー経験者という位ではレギュラーにはなれないから、やめておいたほうが良い」と強硬に止められた。それでも怖いもの知らず？で入部。確かに同期が28人の大所帯ではあつたが、結果的には六年間継続でき、しかも、主将としてやつてこれたのだから、私も大したものである！といいたいところだが、私が最上級生として率いたチームは、殆どが1、2回戦負け、地区予選も勝ち抜けない弱小チームであった。

うる覚えではあるが、私達が入部したときの高三26期までが3年連続で中学優勝し、その記録は神奈川版の保健体育の

教科書にも大きく掲載されていたかと思う。当時の高一28期もベスト4まで行かれたはず。我々の代にも「サッカーがやりたくて栄光を受験した」というメンバーが確かにいた。ところが、私の入部した年の中学県大会で、栄光初の一回戦負け。強さ弱さだけで語れば、「栄光転落」の歴史の始まりとともに私達のサッカー部生活は始まったとも言える。

では、何故突然弱くなつたのか？ ウエバー先生、オレギ先生等、本場仕込みのコーチ不在で、入部当時、いわゆる、トラップ、正確なキック等の基本技術を身につける機会がなかつたというのもあらう（確かに翌年栄光に復帰されたレデスマ先生のもの、32期は、鎌倉大会を一位通過レベルまでは戦績回復している）。また、当時相工大付属、旭という強豪が

だ、一番の原因は、「気質」の変化だつたのかもしれない。昔は「一球入魂」といえば、学生生活の全てを野球やサッカーのボールに賭けることを言つたが、当時（以降の）若者にとっては、様々なレジャー・趣味の世界が広がる中、「サッカーをやるときにはサッカーを一生懸命やる（他の時間にはほかの事に熱中する）」というものに変質し始めたころだつたようだ。今現在の若者は、その辺をうまく使い分けたり、何でも出来るからこそ、一つのことを極める、という器用さをもつたヤツも多いようだ。社会が進化する中で育つた我々はその辺をうまく使い分けることに非常に不器用だったようだ。

という分析はさておき、とは言え、我々の世代にとつても中高6年間の中でサッカーは大きな部分を占めてきたし、やはり大きな思い入れをもつてやつたきた

たことには今でも自負を持っている。特に我々の代は、傑出したプレーヤーの数も少なく、一年先輩の30期のチームにレギュラーで入れたのは1、2名。逆に我々

の代のチームには一年後輩の32期から常たのかもしれない。昔は「一球入魂」といえば、学生生活の全てを野球やサッカーのボールに賭けることを言つたが、当時5、6名がレギュラーで選ばれ、恒常にレギュラーを確保できたのは28名中の6、7名で他の大半のメンバーが控えとて出場できないメンバーが脱落することなく、むしろレギュラー組以上に熱心に部活に参加してくれ、6年間ユーラーとして出場できることなく一緒に続けてくれたこと。そして当時のレギュラーか否かが進化する中で育つた我々はその後も

私達が高二の時、サッカー部OB会が組成され、丁度春休みの合宿練習中に第一回総会、ならびにOB同士の試合、現役対OB戦が行なわれた。当時の「OB」と言えば、当然「強い栄光」が当然だつた時代の方ばかり。28期主体のOBに歯が立たない我々現役を見る先輩方の視線は、落胆・情けなさ……様々な思いがこ

鎌田芳彰 (G K)
桜井健司 (M F)
小野寺直則 (D F)
加藤謙作 (D F)
館川宏之 (F W)
鮫島泰明 (D F)
永江 祐 (M F)
大田 晃 (F W)
八木沢正 (M F)
小林伸輔 (M F)
斎藤実明 (M F)
住 隆幸 (F W)
岩本英昭 (M F)
田中和豊 (M F)
石井康夫 (M F)
藤井 肇 (M F)
井関祐督 (F W)
新名龍彦 (D F)
間々田隆介 (M F)
岡部 直 (M F)
伊豆 太 (D F)
中 秀文 (F W)
脇本浩明 (D F)
浅尾慶一郎 (M F)
山本 勉 (F W)
長富喜一 (D F)

1981年の世相

3月 中国残留孤児47人、初来日
10月 エジプト、サダト大統領暗殺



全員集合。前列左よりメンバーリスト（右ページ）の順

想い出の One Scene

憧れの「国立」

浅尾慶一郎

一九九九年三月六日、見上げる空は快晴、視線をやや落とすと、スタンド最上段の独特的の曲線。そう、私は初めて、栄光サッカー部員、いや、全国のサッカー選手の憧れる国立競技場のピッチに立ったのである。それも、袖を通したのは紺碧のユニフォーム、胸には日の丸のワッペン、まさに「日本代表」として！である。

というのも、来る二〇〇二年のW杯を記念し、日韓両国協力を期する目的で日韓国会議員親善サッカー試合が開催され、サッカー部出身を一つの売りとしてきた私としては、当然、出場招致に即応して参加したものである。とは言え、ここ数年はボールに触るチャンスもなかった状況で、内心、新聞等で「栄光学園サッカー部でミッドフィールダー」と、紹介されてきたものとしての面目がどれほど保てるものか、内心非常に不安ではあったのだが……。

実際キックオフの笛が鳴ってからは、そんなことを思う間もなく、容赦なくボールを追い、駆けずり回ることに。ところが、実際自分のところにパスが回ってきて、当然トランプできるつもりで足を出すも、ボールはその先をすり抜ける。国立の芝生と一体化すべく、華麗なスライディングタックル……と思いつか、相手は軽くかわして走り去る。感覚に体が追いつかず、日頃の運動不足が痛感される。

試合終盤には次第に体もなれ、決定的（に近い!？）パスが出せたり、相手に競り勝てたり、とうやく本来のサッカーに近づき始めた。ボールを蹴りながら、中学時代、初めて公式戦に出場した時の緊張感、初めてクリーンなシュートを放ったときの達成感、等々が頭をよぎった。と、プレーも充実し始めたところで、試合終了のホイッスル。

試合のほうは、結果的には一方的に韓国の勝利。相手には、韓国の正式リーグ経験者も數人含まれ、実力差は歴然であった。「釜本（邦茂）さんがあと何人かいれば……」（笑）なんて声も聞こえたが、それ以上に、韓国サッカーの伝統の強さ、サッカーへの思い入れの強さを感じさせられた試合であった。

につながるパス、確実にボールの勢いを殺す正確なトランプ、等々、基本技術のレベルの高さがありありで、「時代が違うんですよ」「周りのレベルが違うんだから」という我々の言い訳を許さないパフォーマンスで、ますます追い込まれる気分であつた。それでも、最後に現役への贈り物（サッカーボール）を頂き、「皆様の期待に応えるようがんばります！」といふ私の挨拶に、暖かく励ましの掛け声を多数頂き、我々は栄光サッカー部の伝統の中にいるんだという万感の思いであつたのを今でも鮮明に覚えている。その夜、まだ現役残留していた、1期上の主将上原さんと、「恐ろしいプレッシャー」だなど語り合つたりもしたが、それが逆に自信になつた部分も大いにあつた。時は流れ、我々が28歳になつた、平成

5年、丁度両期の兄弟がいたこともあり、我々31期と38期の有志合同で、草サッカーチーム「GLANZ」（グランツ、ラテン語で「栄光」の意味）が誕生した。当初は人々にサッカーをやる連中も多くの期待に応えるようがんばります！」と時代よろしく敗戦先行であつたが、月に2、3回、恒常的にやつてみると体力、感覚も戻るもので、徐々にチームとして体をなすようになつていった。と思ううちに我々の代は30歳の大台に達し、早くも体力の衰える年齢に……。ところが、年齢を経て体力特に瞬発力を失えば、その分、それをカバーする動きみたいなものがみな、身につくようになつていった。スピードでかわせないのであれば、抜き去るふりをして、アーリークロスを上げる、瞬発力がない分、ディフェンスを

の時には無理に突つ込まず時間を稼ぐ、スピードでは振り切られるので、若いメンバーを必ず余らせ、カバーの体制をとる、等々、逆にプレーの質は年々上がつて行つた。その上、チームの半分は若さバリバリの38期で、技術的に優れたメンバーも複数いて、フィニッシュは彼らに任せ、そんなチーム作りが出来、好成績を残し始め、所属した横浜市社会人3部リーグで優勝、昇格した2部リーグでも2年後に優勝、1部に昇格、そして一年、その一部でもうとうとう優勝！いつの間にか負けることが珍しい、チーム内では負けることが許せない、そんなチームになつてはいる。

O B会設立当時の現役→大学生であつたこともあり、大先輩O Bの皆様にもかわいがつて頂きながら（就職等でも大変

お世話になりました！）、それでも、OB会の行事等に出席すると今でも、我々が栄光の（強い）伝統を崩してしまった始まりの世代なんだ、という罪悪感にも一 parity を必ず余らせ、カバーの体制をとる、等々、逆にプレーの質は年々上がり、仲々チームとしても機能せず、現役時代よろしく敗戦先行であつたが、月に2、3回、恒常的にやつてみると体力、感覚も戻るもので、徐々にチームとして体をなすようになつていった。と思ううちに我々の代は30歳の大台に達し、早くも体力の衰える年齢に……。ところが、年齢を経て体力特に瞬発力を失えば、その分、それをカバーする動きみたいなものがみな、身につくようになつていった。スピードでかわせないのであれば、抜き去るふりをして、アーリーカロスを上げる、瞬発力がない分、ディフェンスをとまり、サッカーを続けているメンバーのサッカーへの情熱は、どの世代にも劣らない、と確信している。そんなことを思いつつ、全力で走れるのもあとわずかという焦りとともに、「強い栄光」を体現すべく、「グランツ」でボールを追い回す週末が今も続いているのである。

32期

We are

「教育活動」など超越して「負けず嫌い」を身体で教え込んでもらつた

いまわかる、 サッカーで得たもの

広瀬有二

として生まれたならば、サッカーの血が全身に流れているのは当然だろう。昔は自身でもプレーをし、審判の資格も持つなど、サッカーについての知識は豊富だった。だから、指導は熱い。なにせ、小学校時代とともにサッカーをやっていたのが3、4人しかいないチームである。おまけに、練習はたったの週2回。しかも24年前すでに、けつこうな年齢であつた。

だが、この人は年齢なんか超越している。もちろんイエズス会の神父さんなのだが、聖堂よりも、教室よりも、グラウンドが似合っていた。迫力ある体格（胸囲は推定120センチ）、深くくぼんだ眼窩の奥にある鋭い眼（サングラスをかけているときよりも怖い）、大声を出していられるわけではないのにグラウンドの隅々まで聞こえる音圧の高い声（グラウンドにいながら、職員室の窓際にいた先生に話しかけたこともあった。たぶん聞こえただろうが、相手の声は届かない、当然）。スペイン、マラガ出身。彼の地に男兒

として生まれたならば、サッカーの血が全身に流れているのは当然だろう。昔は自身でもプレーをし、審判の資格も持つなど、サッカーについての知識は豊富だった。だから、指導は熱い。なにせ、小学校時代とともにサッカーをやっていたのが3、4人しかいないチームである。おまけに、練習はたったの週2回。しかも24年前すでに、けつこうな年齢であつた。

レデスマ先生はめげなかつた。インステップキック、インサイドキックの蹴り方、トラップのしかた、そしてなによりも基礎体力作りと、まさに一からチームを作つていつたのだ。

当時を思い出すと、まさに昭和時代のサッカーリングだつた。大きなグラウンドとサブグラウンドという「面積」だけは、

確かに誇れた。だが、雨が降ると巨大な湖が至る所にでき、それが乾けば、いびつな形でガチガチに固まる。グラウンドの周囲には側溝がむき出しになり、大けがする人間がいても不思議ではないし、トラックと反対側のゴール裏はすぐ石垣。いくつかのサッカーボールは真芯で蹴つても足が痛くなり、ヘディングは実、身体に悪かつたはずだ（その分、試合球のすばらしさを実感）。いまとなっては、懐かしき一人なのではあるが。

レデスマ先生は、生物のご担当であり、そのせいか、体調面のケアは人一倍だった。「夏の練習中は、頭にタオルを巻け」。これがまた、かつこうわるいのである。

腰や膝を痛めたら、病院ではなく接骨院に行け」。素直なぼくらは大挙して大船接骨院に通い、レデスマ先生は院長からお礼の品をもらつたといつうウワサもあつた。でも、スライディングタックルの練習をさせ、腿から血を流している選手がえらい、などとほめたりしていたのも思ひ出す。破傷風菌がいる、といつうウワサのサッカーリングなのに。

五十嵐大（D F）
岩沢宏一（G K）
梅津立（M F）
梅原克己（F W）
織田恭司（M F）
金子雅是（M F）
黒坂大路（M F）
島田明（D F）
菅井祐之（D F）
鈴木千広（M F）
高科淳（D F）
竹田徹（M F）
竹山征人（D F）
利重孝夫（F W）
内藤文樹（F W）
中村暢秀（G K）
馬場英尚（D F）
浜田穰太郎（D F）
坂東順治（G K）
広瀬有二（D F）
町田弘一（D F）
師岡健一（F W）

1982年の世相

5月 フォークランド紛争
6月 東北新幹線、11月 上越新幹線開業
W杯第12回スペイン大会、イタリア優勝

想い出の
One Scene

「猛牛」と「ロバ」

竹山征人

本来授業に向いているべき意識が空腹感と睡魔の狭間を揺れ動いている瞬間、ふと気付くと校庭のトラックの更に彼方からかすかに聞こえてくるエンジンの息遣い。その方向に視線を向けると決まって、まるで「タオルを頭に巻きつけた海賊が猛牛にでも跨り土煙をもうもうと巻き上げながら縦横無尽に駆け巡る」がごとく、華麗なハンドルさばきで（確か赤い）トラクターを操るレデスマ先生の姿を見つけることができたものです。どこから手に入れたのかは聞きそびれてしましましたが大きな鉄枠をひかせて、私たちの午後の練習に備えてグランド整備に精を出してくださっているのでした。

嵐の前の静けさにも似た情景を、先生に対する感謝とこの先いつ降りかかるかも知れぬ災難（雷？）に対する胸騒ぎの両方が入り交じった、複雑な感情を抱きながら過ごしていた時間を懐かしく思い出します。

トラクターと並んで忘れられないのが、同じく先生が遠征試合や教会への普段の足として使っていた黒いバイクです。確か125ccくらいの大きさであったとは思います。先生が跨ると、荷物を山積みにして今にも潰れそうな「小さなロバ」のように見えました。それでも銀色に輝くサングラスで決めた先生の出立は、映画俳優も顔負けのオーラを発しており一種の近寄りがたさがありました。

確かに誇れた。だが、雨が降ると巨大な湖が至る所にでき、それが乾けば、いびつな形でガチガチに固まる。グラウンドの周囲には側溝がむき出しになり、大けがする人間がいても不思議ではないし、トラックと反対側のゴール裏はすぐ石垣。いくつかのサッカーボールは真芯で蹴つても足が痛くなり、ヘディングは実、身体に悪かつたはずだ（その分、試合球のすばらしさを実感）。いまとなっては、懐かしき一人なのではあるが。

レデスマ先生は、生物のご担当であり、そのせいか、体調面のケアは人一倍だった。「夏の練習中は、頭にタオルを巻け」。これがまた、かつこうわるいのである。

腰や膝を痛めたら、病院ではなく接骨院に行け」。素直なぼくらは大挙して大船接骨院に通い、レデスマ先生は院長からお礼の品をもらつたといつうウワサもあつた。でも、スライディングタックルの練習をさせ、腿から血を流している選手がえらい、などとほめたりしていたのも思ひ出す。破傷風菌がいる、といつうウワサのサッカーリングなのに。

肉体的にも精神的にもけつこうへヴィ



高校集合写真（コーチの26期・加賀山さんと）



中学集合写真（レデスマ先生、東郷先生と）

なトレーニングのおかげで、僕たちはそこそこ強くなつていった。鎌倉地区で優勝し、湘南ブロックで戦うことができた。フォーメーションは、4—3—3一辺倒。スイーパーを置き、その前に3人のディフェンスが並ぶ。シンプルだが、マスターしやすい形である。

中学時代は、たしかに県内のどのチー

ムとやつても、試合にならないほどの実力差は感じなかつた。ただ一校、大庭中学校との試合では、0—9というチーム最大の点差で敗れている。当時ぼくらより1学年下ながら右ウイングで点をとりまくった大庭中のエースに、後年、このゲーリーのことを見えていたるかを聞く機会があった。「覚えていりますよ。栄光つていうと、賢いつていうイメージがあつたんで、サッカーでボコボコにしてやろうと思つてました」——日本人として初のJリーグ得点王となつた福田正博の素直すぎるコメントである。

試合に負けると、レデスマ先生は機嫌が悪くなる。子供のような言動にでることもしばしばだつた。「部活動は教育活動の一環」という正論にはまるつきりあつはまらない。先生には、サッカーで「チームワーク」とか「忍耐力」とかを身につけ、後の人生のプラスにする、なんて発想はまるつきりなかつたんだろうと思う。では、先生のあふれる情熱は、どうから起こってきたものなのかな。それが、社会人になつて10年を過ぎたいま、ようやくわかつたような気がする。

「負けず嫌い」——シンプルだが、大切なことだと思う。負けたくない、勝ちたい。その気持ちは、現在の日本代表チームも、社会に出ているわれわれも、いい結果をつかむために不可欠なことなのだ。試合は、勝つためにする。何にでもあてはめられる真理を、身体で教え込んだ。でもうたレデスマ先生と6年間のサッカー部員としての生活に、いまさらながら感謝している。

33期

We are

26期の三人の先輩が指導したエンドレス・ダッシュ——地獄の夏合宿

個性派プレイヤー 再び集合

柳下和慶

33期サッカー部は一部退部者がありながら、ほぼ15~18名のメンバーで6年間ともに過ごしてきた。小柄なメンバーが多くたこともあり、決して強い学年とは言い難かったが、他の期と同様に、個性的な構成であった。

*
赤堀 G.K. 長身を生かしたダイビングキヤッチは印象的。かつこよさでは群を抜く。

赤堀 G.K. スマートな体型を武器にゴーリマウスを6年間守り、スマートな指示を後方から出し続けた。4ヶ国語をやつる彼は試合中レデスマ先生とスペイン語でやり取りし、相手を搅乱した。荒嶋 錛いプレーと甘いマスクは、相手プレーヤーとマネージャーを惑わせた? (結婚してたらごめんなさい)

有田 独創性あふれる彼の奇想天外なフエイントは、ボールさえ動いていれば敵はいなかつただろう。

安野 サッカー部のコンピューター。数字には強かつた。

石川 現在の体型(横も縦も)からは想像ができない小柄ではあったが、すばしつこく相手が嫌がるプレーをした。

岩沢 そろばん日本一の父を持つ彼の南京錠を開ける才能は、ひらめきと体力でゴールマウスもこじ開けた。

岡本 正確なリフティング、正確なパス回し、まっすぐなシュート。彼の性格そのものである。

川嶋 G.K. 長身を生かしたダイビングキヤッチは印象的。かつこよさでは群を抜く。

小西 短距離が早くウイングを主たるボディショーンとしていたが、長距離も早く1500m走は33期一番であった。問題はセンタリングを上げる位置がゴールラインより先だということぐらいた。

酒井 大型DFで敵を翻弄。卒業後はパーゴットに……。制服がさぞ似合うことだろう。

櫻木 さらにもう一人大型DF。右手と右足が同時に出そうなものもあるが、その破壊力はダンプ並。黒ぶちのめがねが飛び散ることもしばしば。

佐々木 鍛え上げられた基礎体力、天性

の頭脳を武器に活躍。でも彼のコンピューターもたまにフリーズしてしまう。それがまた素敵である。

高田 小さいだけではない、すばしこさが売り。時に radicalなプレー

0対6(?)の大敗でチームデビューし、

負けた方が多かった記憶がある。

新美 中学時代では、皆様もご存知の通り、

かのレデスマ先生の指導のもと、サッカーモード勉強もしつかりしなさいということ

で、試験結果・点数を先生の部屋まで見

せに行く決まりがあった。サッカーの練習より、先生の部屋のドアを開ける時の方が怖かった。

高橋 時代は26期の小林さん、押本さん、加賀山さんの監督・指導のもと、チーム作りが行われた。特に地獄の夏合宿は忘れられない。午前午後のはじめの30~45分走。これがかなり速いスピードである。

ダッシュ。笛が吹かれるたびにターンを

続け、エンドレス。小林さんの笛次第。

運動生理学では考えづらい、途中摺水は

ごくわずか。しかしながら夏の選手権予

選では、どのチームより体力はあったと

思われる。腿の太さも太くなつた。

赤堀 毅 (G K)
荒嶋宗徳 (F W)
有田 淳 (M F)
安野正士 (F W)
石川紀彦 (F W)
岩沢宏和 (M F)
岡本洋一 (F W)
川嶋洋生 (G K)
小西 秀 (F W)
酒井孝信 (D F)
櫻木琢也 (D F)
佐々木真哉 (D F)
高田 純 (F W)
岳 俊太郎 (M F)
新美達也 (F W)
日野 健 (F W)
三宅仁司 (M F)
柳下和慶 (D F)
吉村匡則 (G K)

1983年の世相

- 4月 東京ディズニーランド開園
- 7月 米、初の全国的エイズ対策会議
- 9月 ソ連機、大韓航空機を撃墜



レデスマ先生を真ん中に中学時代

そんな中でほとんど退部者を出さず、6年間を共につくことができたことを誇りに思ふ。33期では、正月には皆実家に戻るだろうということで、高校卒後、毎年正月元旦を機に、来年から再開しよう。

想い出の
One Scene

あの夏の日、歴史に名を残す怪挙!?

三宅仁司

中高6年間で思い出に残っているシーンは数々あります。まず、中1の時の初めての試合。確か暁星中との試合でした。0-7位で負けて、えらくへこんだ記憶があります。ただ、決して強い代ではありませんでした。が、各個人のプレースタイルは個性的なものが多く、見る者を魅了していましたように思います。特に、中学校時代にチームのストッパーだった中根君の垂直クリア（真上にたかあーく上がるんです）は味方だけでなく、敵をも慌てさせておき、想い出のワニシーンですが、あれは高校2年の夏だったでしょうか、恒例の夏合宿でのことでした。当時我々は26Kの押本、小林、加賀山の3氏のご指導を仰いでいました。担当を分かり易く言えば、主に、押本・加賀山両氏は技術面指導、小林氏はフィジカル面指導だったと思います（小林氏にも勿論技術面のご指導を頂きましたが）。その小林氏のフィジカルトレーニングのメニューは過酷なもので、かつ、その年の夏はかなりの猛暑だったと記憶しています。

中高6年間で思い出に残っているシーンは数々あります。まず、中1の時の初めての試合。確かに暁星中との試合でした。0-7位で負けて、えらくへこんだ記憶があります。ただ、決して強い代ではありませんでした。が、各個人のプレースタイルは個性的なものが多く、見る者を魅了していましたように思います。特に、中学校時代にチームのストッパーだった中根君の垂直クリア（真上にたかあーく上がるんです）は味方だけでなく、敵をも慌てさせておき、想い出のワニシーンですが、あれは高校2年の夏だったでしょうか、恒例の夏合宿でのことでした。当時我々は26Kの押本、小林、加賀山の3氏のご指導を仰いでいました。担当を分かり易く言えば、主に、押本・加賀山両氏は技術面指導、小林氏はフィジカル面指導だったと思います（小林氏にも勿論技術面のご指導を頂きましたが）。その小林氏のフィジカルトレーニングのメニューは過酷なもので、かつ、その年の夏はかなりの猛暑だったと記憶しています。

合宿中のある日の午前中、ダッシュ・中距離走のメニューをこなした後にわざかな時間の休憩を与えた我々は、意識も朦朧としてサブグラウンド脇、高鉄棒後ろの水飲み場に向かいました。その時に、私とその横にいたのは岳君だったでしょうか、我々二人は信じられない光景を目にしたのです。普段からその旺盛な食欲に定評のあつた岩沢君が、やはり朦朧とした表情で、「腹減って死にそうだから、これ食べるよなあ?」と言つてしまふみこみ、高鉄棒の横に生えている青々とした雑草を見つめているのでした。私と岳君が答えようとしたより一瞬早く、彼は右手で雑草の束をわしづかみにし、おもむろに口へと運び、口一杯に頬ばり、そして咀嚼はじめました。彼は「苦えや」と言つたものの、吐き出しませんで、それを胃の中へ収め、若干の元気を取り戻した様子で練習を再開しました。岩沢君の底知れない体力の源泉を見たよう

の夜に戸塚・笠間のファミリーレストランに集合した。残念ながら数回しか実現していないが、今回の記念誌発行を機に、来年から再開しよう。

34期

We are

「県内最激戦区」湘南地区予選を突破し、アスリート揃いの25名の大所帯

34期主体チームの概括

中学時代はスペイン人のレデスマ先生を監督に、24、25、26期の県大会3連覇

の再現を見たものの、主要な大会では期待に応えられずに鎌倉市予選で敗退。中央大会へのタイトルとは関係ない中学3年秋季の最後の鎌倉市大会でなんとか優勝した。高校は、28期の太田さんをコートに迎え、一つ下の35期からの逸材も加わり、県大会シード権(BEST16)を目指してチーム作りをすすめた。6年ぶりに新人戦での湘南地区予選を突破するも、最後の壁は越えられず、関東大会予選で県BEST32止まり。抽選に恵まれたと思った総体予選もノーマークの県川崎に足元をすくわれ、2回戦でよもやの敗退。苦い思い出となつた。

高校2年の秋、もしくは冬、我々34期を中心とするチームは、県下ベスト16を賭けて日大付属高校と熾烈な戦いを繰り広げていた。かなり攻め込まれる展開であつたが、それでもスコアは1対0で我々がリードしていた。後半もあと残り3分、我々は間違いなく勝利を手中に收めようとしており、敵は明らかに焦つていた。

ゴールキーパーを務めていた私はしかし、襲つてくる不安感を拭い去ることができなかつた。あと3分、点を取られなければ勝てる……。守り切れるだろうか……。いや、あと3分という正確な時間の認識さえなかつたかも知れない。残り時間が少ないことは分かつていていたが、それでいて永久に続く時間のように感じられた。

試合はその後延長に入り、相手に更に1点追加を許すも、味方も執念で1点をもぎ取つて引き分けに終わり、PK戦の末敗れ去つた。私にとっては、あのパンチングがすべてだった。なぜあの時……勇気をもつてボールをキャッチしようとしたのか……。

苦々しい思いと同時に、お前のせいじゃないと気遣つてくれた仲間たち、哥子、先輩、後輩の優しさを、今まで時折思い出す。

* 選手の置かれている状況は治療法に大きく影響します。例えば、最後の県大会直前に疲労性の障害(筋肉や腱の炎症など)を起こしているような場合です。医者によつて考えがあると思いますが、僕は選手に悔いが残らないような選択をしてもらいます。抗炎症作用の強いステロイドホルモンと麻酔薬の局所注射などをする事もあります。自分は医者になるまで経験がなかつたのですが、これはものすごく効くことがあります。

もうだいぶ記憶も薄れ、ディテールは定かでなくなりつつあるが、それでも感

覚的な部分での、あの悔しさと虚脱感を忘ることは、多分一生ないだろうし、また忘ることはできないだろう。

焼き付いている。私は取ろうとすれば取れたであろうボールを、落球を恐れ、バンチングで逃れようとした。そして、バンチングしたボールは、あらうことか相手への願つてもない絶妙なセンターリングとなり、ボールは鮮やかに自陣のゴールネットを揺らした。

团炎(22歳)、右手舟状骨骨折(23歳)。これらは、私自身が中学から大学に至る12年間のサッカー部生活の中で経験した怪我です。幸いそのたびに競技に復帰出来ましたが、今から考えるとあの時もつと違う方法、治療法があつたのではと考えることもあります。栄光卒業後、医学部に進んだ私は整形外科医になり、多くの選手達の怪我を診てきました。この間経験の中でも少しでもみなさんの役に立つものがあればと思い、今回寄稿させていただきます。

鳴瀬 晶 (G K)
原田雅樹 (G K)
高科 謙 (D F)
藤本慎司 (D F)
種田義雄 (D F)
竹山直人 (D F)
今井良松 (D F)
山田康太郎 (D F)
高井 真 (D F)
古川 晃 (D F)
丸谷徳広 (D F)
落合 剛 (D F)
辻田敏宏 (M F)
横井 聰 (M F)
永井克朗 (M F)
田中 徹 (M F)
天沼耕嗣 (M F)
埋金洋介 (M F)
井上俊一 (F W)
福田 明 (F W)
川村昌広 (F W)
恵良文人 (F W)
梅津 伸 (F W)
馬場泰尚 (F W)
見須 智 (F W)

1984年の世相

- 1月 アフリカ大飢饉
- 3月 グリコ森永事件発生
英フーリガン、欧州各地の試合で大暴れ

思い出

鳴瀬 晶

相手の攻めをディフェンスがなんとかコナーに逃れ、そのコナーキック。

もうだいぶ記憶も薄れ、ディテールは定かでなくなりつつあるが、それでも感

状態だけが、今日まで妙に心に生きしく

整形外科医の立場から

福田 明

右足関節脱臼骨折(14歳)、右足関節外側靱帯損傷(19歳)、右アキレス腱周

すごく効くことがあります。自分は医者になるまで経験がなかつたのですが、これはものすごく効くことがあります。

障害の程度にもよりますが、一試合限



総勢25名の部員は当時学園内最大派閥。28期太田コーチを囲んで



主審をするレデスマ先生と中学最後の公式戦

主な戦績

（中学）鎌倉市大会優勝

（高校）

選手権大会予選（3回戦敗退）

大沢高（2-0）奏野高（2-0）

湘南高（0-3）

新人戦中央大会（県ベスト64）

多摩高（0-1）

関東大会県予選（県ベスト32）

翠嵐高（4-0）、日大高（2-2PK 負け）

高校総体県予選（2回戦敗退）

厚木商（3-0）、県川崎（1-1PK 負け）

定とか、限られた時間ならプレー可能になることもあります。しかし、選手寿命を短くすることもあり得るので、選手が大学や社会人でも長くプレーしたいとなると慎重な対応が必要です。また、靱帯や膝の半月板を傷めた場合なども、手術をするとなるとリハビリも含めて復帰に数ヶ月要することもあり、特に時間の限られた学生スポーツの場合判断が難しいことがあります。鎮痛剤やプレー時間の制限などでごまかしながら続けることも不可能ではありませんから。

このような話は私も医者になるまではほとんど知らなかつたことです、過去に主治医に質問もしませんでした。ほとんどの場合、言われるままに検査や治療を受けていました。医者に聞くのは気が引けたり、聞いてもわからないんじないかと思つたりする事もあるからです。

しかし、いろいろな治療法を聞いて、調べてベストの選択をするために、是非、医者にどんどん質問して下さい。曖昧な返答しかされなかつたり、丁寧な返答がない場合は遠慮なく他の医療機関を受診して下さい、その時には、できればレントゲンフィルムや紹介状を依頼して持参すれば理想的です。

以上、当たり前のことが多いかも思いましたが、現役の諸君や、少年サッカーなどの指導に当たられているサッカーチームOBの皆様のお役に少しでも立てば幸いです。もちろんここに記したことは、多分に私の私見が含まれており、異論のある方もあるでしょうが、あくまで一つの意見として参考にして頂ければと思います。私は現在、東京大学の付属病院整形外科の研究室により、膝関節外科の基礎的な研究に携わっています。また、週に一回火曜の午後に膝関節の専門外来を同僚数名と開いておりますので、受診を希望される方は御連絡下さい。（34期 福田 明・電話03-3815-5411 内線33375、メールアドレス：FUKUDAORT@h.u-tokyo.ac.jp）。

We are 35期

怪我と惜敗に泣いたが、練習量とチームワークは抜群だった

思い出のシーズン

小宮英之朗

35期として思い出に残るシーズンとなつたのは、我々が中学3年生になつてすぐの、春季大会である。

当時を思い起してみると、まず湘南地区での予選があり、同地区でベスト16に残った学校が本大会へ、そして本大会では全64校によるトーナメントが行われ、優勝校は全国大会まで駒を進めることができた。

我々は、善行中学ともう1校（失礼ながら名前は忘れてしまった）で1グループとなり、総当たりによるリーグ戦を行うこととなつた。次の試合に進むためにも、このリーグで2位以上を確保する必要があつたが、2位になると、別リーグ1位（かなりの強豪だったと思う）との1発勝負が待ち構えており、形勢不利になることは明らかであった。

リーグ第1戦は、県内有数の強豪である善行との試合であった。我々は4-3のシステムで試合に臨んだが、開始

後10分位であつたろうか、ペナルティエリア付近で柳井（高校時主将、当時右FW）がドリブルで攻めあがり、右に開いた桑波田（中学までサッカーチーム、当時CF）に右アウトサイドでショートパスを送つた。それを受けた桑波田は、さらに右にかわした上でシュートを放ち、これが見事ゴールとなつたのである。自分は

MFをしていたこともあり、その場面はかなり後ろから追つていたのであるが、柳井のショートパスには大変驚かされたことを今でも覚えている。なぜなら、當時指導をいただいていたスペイン出身のレデスマ先生の基本戦術はキックアンドラッシャであり、中盤でのショートパスなどは、『おんなバス』といつてよく

MFをしていたこともあり、その場面はかなり後ろから追つていたのであるが、柳井のショートパスには大変驚かされたことを今でも覚えている。なぜなら、當時指導をいただいていたスペイン出身のレデスマ先生の基本戦術はキックアンドラッシャであり、中盤でのショートパスなどは、『おんなバス』といつてよく

怒られていたからだ。もちろん、今考えれば全てのショートパスが否定されいたのではなかつたのであるが、当時はそういった固定観念があり、自分としては、ましてゴール前でシュートをせずにショートパスを出すなどもつてのほかではなかった。そんな中でのショートパスである。柳井のセンスと精神力の強さに驚かされる一方、先取点を奪つたことによつてチーム全体が高揚していくのがはつきりと感じられた。さらに前半、今度は自分（当時左MF）が左サイドをドリブルで切り崩してゴールキーパーと1対1となり、追加点を奪うことになる。その後終了間際に、善行には1点を返されたが、結果2-1で勝利しチームは完全に波にのつた。もう1チームは、チーム力としては一段落ちるレベルであり、善行は15-10、我々は2-0（ベストメンバーで臨んでいたが）でそれぞれ勝利した。

こうして1次リーグを2勝（リーグ1位）で突破した我々は、2回戦、別リーグ2位のチームとの一発勝負にのぞむこととなつた。会場は大庭中学であつたが、我々を見て、相手チームが、対戦相手が

思い出のOne Scene

涙

我々35期が中心となったのは、昭和60年夏の高校選手権予選から昭和61年5月のインターハイ予選まで。34期の県ベスト32という実績を上回るべく、師岡、竹田、広瀬の3氏（32期）の指導を仰ぎ、おそらく栄光サッカー部の歴史の中で最も多いためではないかと自負するほどの練習試合を組んで大会に臨んだ。

しかし、現実はなかなか厳しく、秋の新人戦、関東大会湘南地区予選では予選リーグを1位で突破し、神奈川県64チームに与えられる本大会出場資格を獲得したものの、いずれも本大会では川崎南高、法政二高に、0-1（延長）、1-2で惜敗、34期のベスト32に並ぶ一步手前で敗れた。

背水の陣で臨んだ最後のインターハイ予選。1回戦では三崎水産高を6-2で圧倒。2回戦は寒川高と対戦。しかし、その前にエース芥川とサイドの攻守の要、西本が怪我で戦線離脱。不安を残してのゲームとなつた。案の定、不安は的中。1点を先制されると焦りがリズムを狂わせ、絶好の同点チャンスも生かせず。その後もカウンターで2失点し、結局0-3で完敗、高校生活最後の試合を終えた。

試合後は、わずか2回戦で敗退した悔しさと、怪我の2人が復帰できるまで勝ち続けてやれなかつた情けなさ、これで6年間一緒だった仲間との栄光でのサッカーが最後になるのかという寂しさで自然と涙がこぼれた。（小島 恭記）

1985年の世相

3月 国際科学技術博覧会「つくば博」開催
8月 日航ジャンボ機墜落事件



史上最多（？）の練習試合をこなして大会に臨んだ高校時代

善行中学ではないことに驚いていたことを記憶している。

この試合は、まさに一進一退、延長も含めて0—0のPK戦となつた。ここで中元（当時GK）が活躍し、4本中3本を止めるという驚異的なセーブでPK戦に勝利し次戦に進んだ。

3回戦は、再度リーグ戦である。ここでは、上位2チームが予選を突破し本大会に進めることとなつていて。同一リーグには、六会中学、御成中学（鎌倉市）があり、どちらも強豪であつた。リーグ緒戦は六会対御成であったが、六会が勝利、御成はすでに負けられない状況で我々と戦うこととなつた。

当時の御成中学には、一人大型で俊足の選手がいて、ほぼ彼のワンマンチームとなつてゐたが、すでに鎌倉市大会等でチームを見ていた我々は、彼に完全なマークを付け、以つて彼を封じることとした。マーク役には芥川（当時MF）が任命されたが、彼は驚異的な粘りで完璧に相手を封じることに成功した。結果、前後半で各1点をあげた我々は2—0で御成に勝利し、この時点で自動的に県大会戦への出場を決めた。その後に行われた六会中学との消化試合は、ちなみに0—0のドローであった。

そして、本大会である。全64校の内、富岡、善行、六会、六浦の4校がシードとなつていたが、六浦とは練習試合を通じて1勝1敗であったことから、我々としてはかなりの自信を持つて大会に臨んでいた。

本大会初戦の相手は御幸中学（川崎市）

であり、試合開始当初は、相手ディフェンス陣の鋭い上がりに翻弄され度々オフサイドにかけられていたが、前半半ば、

井沢（当時スイーパー）からのクリアボールを、オフサイドぎりぎりのラインから抜け出した自分が、相手GKの頭上を越えるシュートを放ち先取点を奪つた。

同じく前半に追加点を奪つた我々は、結果2—0というスコアで勝利し、同日、シード校である富岡中学戦を迎えることとなつたのである。

富岡中学は、同じ会場で我々の試合の後に第1試合を行つたが、壮絶な点の取り合いとなり、結果辛勝するという内容であった。目前でこの試合を見た我々は、次も行けるのでは、という気持ちになつていった。富岡との試合では、開始後数分のところで、自分が相手のバックパスを強引にダイレクトでシュートし、先制点を奪うことに成功した。このとき、自分を含めたチーム全体に「またいける」という雰囲気が高まつていつた。

が、ここから富岡の反撃が始まつたのである。前半早い時間帯で、相手のシュートがDFの足にあたつてコースが変わり同点にされる。この得点は必ずしも落ち込む必要のないものであつたが、チムとしての勢いは完全に止められ、その後前半だけで1—3と逆転されてしまつた。後半は、中元の懸念のセーブもあり1点しか許さなかつたが、結果的に1—4で敗戦することとなつた（この後富岡は、県大会優勝、全国大会3位となつた）。

こうして、我々の春季大会は幕を閉じる

36期

We are

中学では勝ち星ナシ。高校ではOBの指導でベスト16まであと一步

ささやかな誇り

瀧川 穂

もう高校を卒業して15年も経つてしまつて、いまではサッカーをすることがほとんどなくなってしまったが、原稿の依頼があり中学、高校時代のサッカー部についての文章を書こうとして、色々と想い返されてきた。昔を振り返つて徒然に書いてみたい。

今、こうして中学・高校時代のことを思い返してみると、様々な思い出が色付きで鮮明に蘇つて来る。例えば中学時代紅白戦で抜かれたのが悔しくて、思い切り同級生の足を蹴つて怪我させてしまつたことや、暑い夏の練習で頭がボートするほどグランドを走り込んだことなど、今にも声が聞こえてきそうな程鮮明に覚えている。また、練習試合で味方の選手ときれいにワンツーを決めて相手選手を抜き去つたこと、高校最後の試合が土砂降りの雨の中、相手のチームにもの凄いボレーシュートを決められてぼろ負けしたこと……。コマ送りのフィルムのよう

に浮かんでくる。

中学時代、僕らのチームはほとんど勝てなかつた。監督をしていただいていたレデスマ先生と上手いかなかつたのも原因だが、何しろ練習試合をすれば勝つ事がなく、公式戦でも結局一勝もできなかつたと記憶している。高校生になりOBの師岡さん達が指導してくださつたこともあり、県大会ではもう少しでバス

ト16に残れるところまで行つた。

中学・高校時代に多くの活動をしていはすだが、思い返されるのはつくづくサッカー部のことばかりである。現在も連絡を取り合つている仲の良い友人は、なんとかサッカーが強くなりたくて毎日朝練習を自主的にやつていた連中である。本当にサッカー漬けの日々であつたと思い返される。

高校時代に彼女をつくりて遊ぶクラスメイト達を横目で見ながら、"サッカーボールが恋人さ"とつぶやいていた自分は、振り返れば随分寂しい男ではあつたが、少し誇りに思つてもよいのではないからと考えている。

レデスマ先生については多くの諸先輩方もお世話になつてゐると思うので改めることで書く必要はないかも知れないが、私達にとって中学時代のサッカー部はすごく大切なものであると認識していい。なにかを犠牲にしてそれに打ち込む

加えなければならない。

中学時代の私達のチームは弱小であ

り、練習戦・公式戦合わせて一度も勝つた事がなかつた。レデさんは一生懸命指導してくださつたが、チームが勝てない

こともあり、またかなり偏つたメンバーの選抜をさせていたこともあつて、中学3年生の時、私達は反乱を起こした。練習をボイコットしたのである。

きつかけは何であつたか忘れたが、練習中にレデさんに文句を言つたことがあ

青木 誠 (FW)
阿久沢聰 (FW)
跡部智彦 (MF)
植松利夫 (GK)
大橋一陽 (GK)
金子高穂 (MF)
杉田雄心 (MF)
瀧川 穂 (DF)
武沢竜一 (MF)
中村俊彦 (DF)
中村紀之 (DF)
長谷川伸也 (DF)
松井正樹 (DF)
和田賢介 (MF)

1986年の世相

5月 ソ連、 Chernobyl 原発事故
W杯第13回メキシコ大会、アルゼンチン優勝



高校時代



無邪気にじゃれ合ってた頃……



中学時代



高校総体の県予選

いて議論した覚えがある。私はレデさんに気に入られていたこともあり、交渉が決裂した後の唯一の連絡係をやらされて辛い思いをした。その後は高校の練習に参加して、結局それ以降レデさんに指導してもらうことはなく、その後もレデさんと仲直りすることはなかつた。

あのころは本当にレデさんには失礼なことをしたと思う。今はもはや懐かしい思い出だが、いろんな意味で私達を育てていただいたレデスマ先生には今でもとても感謝している。

37期

We are

0対0で引き分け、PK戦で勝ち抜くしぶとさが身上

師岡・広瀬の両先輩 に感謝！

高山幹彦

我々37期生の中学校時代は、当時、学校に赴任しておられたL.P.レデスマ先生の指導のもと、練習を行っていました。特徴的だったのは、シュート練習が比較的多く、今まで習つたことのないような新しい練習方法を採り入れていたことでした。

試合におけるフォーメーションは4・4・2を採用し、当時、他の大多数のチームが4・3・3システムを採用しており、画期的な戦術を取り入れていました。公式試合の戦績はあまりよく覚えていませんが、何とか、鎌倉市のベスト4には残り、次の湘南大会等に進むといったレベルで、過去の成績から抜きん出て優れているといった強さではないにしろ、万年一回戦負けというような弱いチームではなかつたことを覚えてています。

我々の代は、他クラブを含めた同級生の中でも身体能力の高い選手が多く、体

育祭の各クラスのリレー代表の半分程度はサッカー部の選手がその座を占めるほどであり、当時の他のクラブよりは公式大会の戦績は良かったことを覚えていました。

当時の中学生のサッカーレベルは「つなぐサッカー」には程遠く、ディフエンダーのクリアボールを背が高く足の早いフォワードが詰めるというようなサッカーでした。特に鎌倉市では、深沢中学、玉縄中学といった強豪校が選手の身体能力で抜きん出ており、強豪校と対戦したときは、防戦一方でした。何とか0対0のまま引き分けに持ち込んで、PK戦で勝ちぬくというような試合展開が多く、一番記憶に残っている試合としては、両チーム5人ずつでも決着がつかず、8人目でようやく我々が勝利したという試合もありました。

この時は、神奈川県でベスト16に進んだように記憶しております。

高校に上がると、コーチは学校の教師の方ではなく、サッカー部のOBで32期の師岡さんと同じく広瀬さんという2人の先輩が、週2回の練習を指導しにきて

くださいました。

お二人は当時、大学生であられたかと思いますが、お忙しい中、貴重な時間を割いて我々後輩を熱心に指導していただいたことが記憶に残っています。

高校時代の戦績は、特に中学時代ほど強くもなく、2、3回戦で敗退したように記憶しております。

以上、簡単ですが、37期のエピソードです。

伊東大輔
恵良理至
岡 金沢 真
小島啓作 彩
下地一 霞
鈴木 千賀雄志
高山幹彦
春永宗俊
平本知寛
馬米洋平
蒔田裕一
増成秀樹
本橋 行
森崎龍郎
八田直人
安井明紀
山下光司



仲は良かったが「実力主義」のチームだった

1987年の世相

4月 国鉄民営化、JR誕生
5月 ソ連、ペレストロイカ始まる

*Memory
of
World Cup
2002*



© J M P A

38期

We are

31期との合同チーム「港南グランツ」を結成し、横浜市リーグで活躍中！

(荒川英輔)
 安藤秀行
 (井生健太郎)
 内山 貴
 小川 淳
 大庭雅彦
 加藤恒夫
 加畠直之
 熊野一穂
 小林賢司
 佐藤淳一
 斎藤 正
 島田洋介
 清水 拓
 田中 純
 高崎康治
 高橋 秀
 高山大樹
 立川 晓
 永田裕之
 (長良健二)
 野中隆介
 藤井 玄
 程原 誠
 本間友幸
 本間希樹
 弓削 洋
 山本雅章
 吉田和洋
 巨理 実

※()内は中学時代のみ

1988年の世相

- 3月 青函トンネル開業、「東京ドーム」オープン
- 4月 アフガニスタン和平協定調印

38期サッカー部激闘の記録

本間友幸

私たち38期は、レデスマ先生に直接指導を受けた最後の世代です。その中学生時代の思い出をいくつか――。

その1。ダブルヘッダーの鎌倉市大会。

1試合目に延長戦で先制されたにも関わらず、終了間際に連続2得点して逆転勝ち！興奮冷めやらぬときに、なぜかレデスマ先生の怒りが爆発し、講堂の裏の斜面でお説教をくらった。落ち込んだ雰囲気で2試合目は敗退。そんなことがありました。

その2。ある試合の帰りに大船教会の部屋を借りて反省会をしたことがあります。このときは先生が部員に玉子丼をご馳走してくださいました（笑）。妙に感動したことを覚えています。

その3。熱血レデスマ先生に負けず劣らず頑固者揃いの私たちは、ちょっとしたことから先生と衝突し、一部の部員が試合をボイコットしたこともありました（「反乱軍」という呼び名も懐かしい）。

卒業から12年が経ち、断片的な映像や印象しか浮かばないが、印象が強いのはよく走られたことだ。

毎朝のトラック5周、気分転換のクロスカントリー、部活動中の周回コース、練習最後のグラウンド往復ダッシュ。特に練習最後のグラウンド往復ダッシュは、短距離のおそい私には苦痛の時間だった。

ターンのときに何メートル短縮できるだろうなど姑息なことを考えながらスタートするも、ズルをせずにターンしたY君やH君、B君の10メートル先の背中を追いかけながらゴールすると、情けなさどうしろめたさでいっぱいになってしまった。それでも片付け、着替えをするうちに充足感ではなくとしてダッシュのことは忘れた。

冬になると帰途、駅そばに寄り道することがあった。私は食べるのも遅く待たせることが多いので、ここでもスピードアップを意識して食べた。

今でも同期や31期の先輩方と週末サッカーを楽しんでいる。試合後のダッシュがないかわり、今の競争は結婚なのかもしれないふと思つた。

(本間記)

……。

そんな私たちは、5～6人が37期の先輩方のチームでレギュラーを獲るなど、

個人的なサッカーの実力は捨てたものではなかつたのですが、なにせ「小学生のときはエースでキヤブテンでした」というような私の強い個性派が多く、まとまりが悪かつたせいでしょうか、高校時代

には目立った戦績を上げることはできませんでした。

当時は現在のようにサッカーが注目されておらず、戦術や練習方法、指導方法などがしっかりと研究されていなかつたのも残念なところです。

時は過ぎ、平成6年3月、有志が31期の先輩方とともに草サッカーチーム「港

南グランツ」を結成。

当時は、大学の体育会でサッカーをやっている者もいましたが、ほとんどは高

校卒業以来ボールに触つていらないというような者が多く、試合後半は皆バテバテを重ねるに従い体力もつき、コンビネーションも良くなり、楽しんで良い試合ができるようになりました。現在は、横浜市1部リーグ（平成12年度優勝！）、横浜市都筑区リーグ、荏田リーグなどを中心に活動を続けています。

私たちも今年で30歳。仕事は忙しくなり（転勤も多いし……）、家庭を持つものはなかなか家を空けられなくなり、サッカーを楽しむのも容易ではなくなつてきますが、これからも気分はプラティニ、マラドーナのつもりでボールを追いかけて回したいと思います。

そしていつか、私たちの子供たちと一緒にプレーできる日まで、ボールを蹴りつづけたいと思っています。

以下は、現役時代の公式戦の記録です。



「小学生のときはエースでキャプテンでした」といった我の強い個性派が多かった



サッカー大好き！は今もかわらない

【中学】

鎌倉市新人戦（昭和60年11月）

鎌倉学園 3—0 ○

腰越中 1—3 ○

大船中 0—4 ○

御成中 1—2 ○

深沢中 1—0 ○

湘南新人戦（昭和60年12月）

梅田中 7—0 ○

大清水中 1—1 ○ (PK戦)

湘洋中 0—6 ●

大和市退会（招待、昭和61年2月）

大和中 0—2 ●

鎌倉市春季大会（昭和61年4月）

鎌倉中 2—1 ○

腰越中 0—5 ●

湘南大会（昭和61年4月）

中島中 0—4 ●

湘洋中 1—2 ●

鎌倉市大会（昭和61年6～7月）

玉縄中 1—2 ●

附属中 1—2 ● (敗者復活戦)

【高校】

全国大会県予選（昭和63年8月）

(1回戦) 横浜高 4—0 ○

(2回戦) 北陵高 1—2 ●

新人戦 湘南北区地区代表決定戦（昭和63年10月～11月）

北陵高 1—0 ○

寒川高 0—1 ●

藤沢商業 0—1 ●

高校総合体育大会予選（平成1年5月）

63年11月

相模大野 1—5 ●

藤沢商業 0—1 ●

●

39期

We are

キャプテン中心によくまとまつていた。が、聖光に負けてショック！

悲喜こもじも

遠藤 亮

栄光学園を卒業して12年になります。この度、サッカー部創部50周年ということでお話をいただき、懐かしさも手伝つて筆を執りました。

中学時代は、基本的に各学年別々に練習・試合をしていた記憶があります。今思えば、ボールをとつたら前に長い縦パスを出して俊足の入野に走らせてシュートまで、というのが唯一の得点パターンでした。当時は入野だけ飛び抜けて上手でした（高校に入るとなくなつた）。その入野が試合の帰りにモノレールの駅で手広中の部員にからまれ、助け（？）に入ったGKの手塚が返り討ちにあつたのがいい思い出です。

あまり試合で勝った記憶はありません

中学3年の秋から高校生の練習に加わり、スピードもパワーも圧倒され驚いた記憶があります。37期のキャプテンの安井さんは人望があり物静かですが、中学

時代に比べ走り込みなどキツイ練習が多かつたです。ただ37～39期の総部員が70余名と活気があり、非常に楽しい時期でした。38期の斎藤さん、秀さん、吉田さん、サンボンさん、鷗田さん、亘さん、ミーシャさんなど、みな非常に上手でおもしろい先輩達ばかりでした。

僕たちが幹部の代には、キャプテンの久保田を中心としてチームはよくまとまっていたと思います。なぜか高校になつて急に足が速くなつた大須賀、ドリブルなら一番の木村など、タレントも揃つてきました。新しく赴任された的場先生も幼いぼくらをバックアップしてくれました。40期は皆上手で、スタメンの11人を選ぶと40期が3～4人はいついていたように思います。38期の先輩の時にはぼくらは誰も入れませんでしたが、40期の中でも特に上手で、また人格も申し分なかつたD.Fの天野君が亡くなつた時はとても悲しかった事を覚えていました。僕がミサに出席したのは、後にも先にも天野君の追悼ミサだけです。

幹部の代の時は朝7時にグラウンドの横の倉庫（当時は部室の様に使用）で着替え、大須賀・木村・東・山本・鷗田・町田・田代・久保田達と早朝のシユート練習を始めるのが日課でした。5分でも長く寝ていたいと思っている今の自分に見習わせたいです。そこから放課後もみんなで練習するようになりました。

がんばって練習しても成績はかんばしくなく、高校の時も勝った記憶はほとんどありません。勝てると思つていて聖光学院に0～3で負けたのはショックでした。湘南高校や桐蔭学園とも練習試合をしましたが、けちよんけちよんにやられたことを覚えています。夏休みにやられたことです。あれ以来、腰の調子が今ひとつです。

久保田を中心としたチームはよくまとまつていたと思います。なぜか高校になつて急に足が速くなつた大須賀、ドリブルなら一番の木村など、タレントも揃つてきました。新しく赴任された的場先生も幼いぼくらをバックアップしてくれました。40期は皆上手で、スタメンの11人を選ぶと40期が3～4人はいついていたように思います。38期の先輩の時にはぼくらは誰も入れませんでしたが、40期の中でも特に上手で、また人格も申し分なかつたG.K.の天野君が亡くなつた時はとても悲しかった事を覚えていました。僕がミサに出席したのは、後にも先にも天野君の追悼ミサだけです。

それ以外の思い出——。雨で水が溜まつたグラウンドを汚い大きなスポンジ（？）で必死に乾かそうとしたこと。部活の帰りに皆でセブンイレブンに立ち寄り買い物をしたこと。そして体育のトメジ先生にみつかつて殴られたこと。グラウンドの流れでちょっと逆にドリブルしたなんて

わがグラフィティ

入野竜郎

思いつくままに、懐かしの逸話をいくつか。

● 中学の頃の真夏の練習試合。事件は2

試合目に起つた。熱中症で気が狂つたのか、籠が自陣に攻めてきた。ゲームの流れでちょっと逆にドリブルしたなんていうレベルではなく、マジだった。推定

遠藤 亮 (G K)
手塚崇史 (G K)
田代健太郎 (D F)
山本貴史 (D F)
宮本 学 (D F)
栗原 勲 (D F)
若尾和也 (D F)
小川泰彦 (D F)
宮本武郎 (D F)
鈴木邦宜 (D F)
吉田 剛 (D F)
鷗田高幸 (D F)
久保田聰 (M F)
東 克彦 (M F)
町田英夫 (M F)
酒井裕史 (M F)
小林 寛 (M F)
木村 大 (M F)
小泉裕紀 (F W)
大須賀喜彦 (F W)
入野竜郎 (F W)

1989年の世相	
1月	昭和天皇、崩御
4月	消費税3%実施
4月	英シェフィールドのサッカー場、観客94人圧死
11月	ベルリンの壁撤去始まる

トまでしたのだった。

●たしか鶴嶺高校戦のこと。キッカオフ直後、相手のコワモテFWに殴られた。審判が見ておらず、普通なら一発退場になるところをファールにも取られず、後で私が報復をしたらばつちり見られて、イエローをもらつた。あれは納得のイエローだった、と今でも思つている。

●さらに私ごとでいうと、1つ下の弟が桐蔭学園中学のサッカー部に所属しておき、栄光グランドで兄弟対決が実現した。ト4に残ったことも想い出深い。あの時は本当に勝利の喜びを実感したし、青春していた気がする。その後、負けた学校が校門で待ち伏せしており（憂さ晴らしだかつたのだろう）、みんなで逃げたというオマケつきだった。これにはさらに後日談があつて、この大会で私は個人的に優秀賞をもらい、その後、件の待ち伏せしていた中学の監督が私を湘南地区選抜に推薦して下さった。子供心にも感激

当然（？）、負けたけど。

●中学時に鎌倉市のトーナメントでベスコト4に残ったことも想い出深い。あの時は本当に勝利の喜びを実感したし、青春していた気がする。その後、負けた学校が校門で待ち伏せしており（憂さ晴らしだかつたのだろう）、みんなで逃げたと

いうオマケつきだった。これにはさらに後日談があつて、この大会で私は個人的に優秀賞をもらい、その後、件の待ち伏せしていた中学の監督が私を湘南地区選抜に推薦して下さった。子供心にも感激したことを覚えていてる。

したことを覚えていてる。

さて、柴野先生から送つていただいた今現役の戦績を見るにつけて、私たちの頃では考えられないほど強くなつておき、個人的には羨ましい限りだ。もちろん私たちの頃にも名だたるタレントは少なかつた。37期・安井さんのサッカーに対する熱さ、38期・サンボンさんの中学生時代のテクニック、同じく38期・亘理さんの女好き、喧嘩っぽやさ……。40期の近藤が小さいのにめちゃめちゃ上手かつたのもよく覚えている。

●あえて言えば、個人的に私はサッカーチームに対する貢献をプレー面でもリーダーシップの面でも求められていたように思ふ。その期待に応えられなかつたことを時々思い出し、後悔している。サッカーチームの戦術という点ではたぶんチームで一番わかつっていたつもりだが、その割には積極的に関与しなかつた気がする。というより、自ら逃げていたような気がする。今思えば、勝つためにあるべき駒ばかりを考え、今ある駒で勝つ方法、戦略を持ち得なかつた。

その後悔もあって、大学時代には本気で勝ちに行くスポーツ集団に身を置き、自ら積極的に組織に関与することができたと思う。その意味では個人的には中学校時代の教訓が活きたわけだが、当時の部員には申し訳ない気持ちが残る。

ただそろは言うものの、わが39期は人間的には個性豊かでとても面白い奴ばかりだ。実際には卒業後、必ずしも密に接しているとは言えない我々だが、時が経つてそれなりの年頃になれば、皆で集まれる機会も増えてくるだろう。増えて欲しいと願つていてる。



卒業式の後に全員集合！



G.K.・遠藤君のスーパー セーブ

主な戦績

高3	選手権予選	高2
1回戦	海老名高	0—3
高校総体予選		
1回戦	山手学院	3—1

2回戦 二宮高
1—5

● ○ ●

We are 40 期

クラブチームへ、劇団へ、二人の主将は去った。そして二人目、淳哉の恋……

僕たちのブレークハート

書き人知らず

四十期サッカー部には歴代三人のキャプテンが存在した。中高一貫教育の六年間とはいっても、平均二年の「在位」はかなり短いのではないだろうか。派閥間の対立が根深く、政権抗争が激しかつた——ただ、要するにみんな勝手だったから、それだけのことだ。

初代キャプテンの近藤哲生は、全員一致で選ばれた、よくな気がする。中一最初のスポーツ大会で、「スゴイやつがいるらしい」との前評判通り、持ち前のトリッキーなドリブルで大活躍。C組のHなど「近藤くん」と、羨望の眼差しでみつめていた。まだ頬に赤みが残る幼顔ながらも、「近藤くん」が頼もしく見えたものだ。

さつそく迎えた鎌倉市の新人戦では、近藤のドリブルが冴えに冴え、決勝まで勝ち進んだ。当時の中学生レベルのゲームでは、チーム全体のバランスなど関係

なく、一人のスーパースターが存在すれば、難なく勝ちぬけた。

決勝の対戦相手は深沢中学。みんな、キャプテンの神業ドリブルで優勝できると思っていた。

ところが、相手チームのゴール・キーの一喝の声でかいこと! 声が校舎に反射して、こだまするほどだった。この声にリズムを乱され、近藤のドリブルはキレを失った。得点源を封じられた我がチームに勝機はなく、あえなく敗退。準優勝に甘んじた。思えば、これが最高の戦績であった。

敗戦の痛手も癒えたころ、キャプテンの愛称は「近藤くん」から「ムンタ」に変わっていた。生まれながらの姓ゆえとはいえ、ムンタは深く悩んだ。

「オレはこのままじゃ、いけないんじゃないとか……」

中二になつてまもなく、突然、四十期サッカー部全員が社会科教室に呼び出された。近藤がキャプテンを辞めるというのだ。予期せぬ事態に全員が騒然となつた。やはり、ムンタは悩んでいたのか

阿部新治郎 (G K)
生田浩之 (G K)
青木正明 (D F)
天野正彦 (D F)
荒関淳哉 (D F)
大谷潤也 (D F)
中里隆義 (D F)
西口 貢 (D F)
阪野 哲 (D F)
細谷 卓 (D F)
松信哲朗 (D F)
渡邊一輝 (D F)
小柳 剛 (M F)
近藤哲生 (M F)
関口卓臣 (M F)
辻 真悟 (M F)
服部直樹 (M F)
馬場智尚 (M F)
坂野正崇 (M F)
指宿一郎 (F W)
榎 哲哉 (F W)
土井直之 (F W)
長谷川正和 (F W)
原田 宙 (F W)
松崎 匠 (F W)
山田源太郎 (F W)

当時は「二重登録」が禁止されていた。

つまり、クラブチームと部活動のどちらかのチームにしか登録できなかつたのだ。近藤はよりレベルの高いサッカーをするためにクラブチームに所属することを選んだのだ。

近藤がいなくなれば、チームの戦力は半減する。誰もが戸惑いを隠せなかつた。だが、近藤の実力を認めているだけに、より高いレベルのサッカーを求めることが当然だと、みんな分かつていた。

二代目に就任した松崎は、当時はまだ坊主頭だった。キーの一喝にキーパー練習をろくにせず、ミニゲームばかりしていた。本人は、「リネカー」のようなプレースタイルを目指していたらしい。キー一喝なのに、勝手なものだ。

キャプテンになつてからほどなく、松崎が髪を伸ばし始めた。似合わないけれど、アイツも色気があるんだなど、口に出さないが、みんな苦笑いしていた。

だが、またもや社会科教室に呼び出された。悪い予感。案の定、松崎がキャプテンを辞めると言い出したのだ。理由は「劇団に入るため」だという。真剣にそ

の道を目指すのかと思いつきや、真相を聞いて呆れた。当時、人気絶頂だった宮沢かのチームにしか登録できなかつたのりえの大ファンだった松崎は、なんとかして彼女とお近づきになりたくて、芸能界を目指す、というではないか。そんなやつを引き止める理由はない。即刻解任である。

もうキャプテンに何かを求めるのは間違いないのではないか、という空気が全体を支配していた。リーダーではなく、部員のことを考え、ひたすら尽くしてくれた世話を女房のような存在が必要だ。みんな愛に飢えていたんだね。

そこで、荒関淳哉に白羽の矢が立つたのだ。淳哉はひたすらチームのために働く練習メニューや作成からトントンボかけいた。練習メニューや作りからトントンボかけまで、昼夜を問わずに働いた。下校時間の四時をはるかに過ぎるまでサッカーをしていたため、教師陣からも睨まれ、部員からは雑用係扱いをされても、なお耐えていた。

そんな淳哉の心の支えがN娘だった。登校時にすれちがう彼女の黒髪、その瞳からは雑用係扱いをされても、なお耐えていたため、教師陣からも睨まれ、部員は出さないが、みんな苦笑いしていた。でも、淳哉はやがて彼女の黒髪、その瞳からは雑用係扱いをされても、なお耐えていたため、教師陣からも睨まれ、部員は出さないが、みんな苦笑いしていた。

1990年の世相

8月 イラク軍、クウェート侵攻
10月 東西ドイツ統一
W杯第14回イタリア大会、西ドイツ優勝



みんな愛に飢えていた……



タレント揃い?

主な戦績

高2 選手権予選		
1回戦 三崎高	4-0	○
2回戦 平安高	4-2	○
3回戦 藤嶺藤沢高	0-5	●
高3 高校総体予選		
1回戦 横須賀学院	1-3	●



「ああ、あのコの心を奪いたい」

淳哉の想いを知った部員たちは、ある計画を実行にうつした。N嬢を文化祭に誘うのだ。キヤブテンの幸せを思えば、何でもできる。大船駅で土下座をして摔倒し、N嬢がなんとか来てくれるることになつた。

文化祭で告白した淳哉は、念願叶つてN嬢と交際を始めた。藤沢でデートして彼女がレモンスカッシュ好きであることも知つた。めくるめく日々だつた。

ある日、淳哉はN嬢に呼び出された。

N嬢はさまざまな想いをかみ締めながら涙を駆け上つた。毎朝、N嬢とすれ違つていたその坂を。

大船駅のホームにN嬢の涙が光つた。淳哉はさらさら榮光坂を駆け上つた。毎朝、N嬢とすれ違つていたその坂を。

「実は、前に付き合っていた彼とヨリを戻そうと思うの」

ゴール前で力尽き、膝をついた淳哉を見て、すべてを悟つた。何も聞くまい。普段は「おい、雑用」と、淳哉をコキ使つていたみんなだつたが、誰よりも愛に飢えていたのは淳哉だつたことを知つていた。

その日、陽が暮れてもなお、トンボをかけ続ける淳哉の背中は、みんなの心に刻み込まれた。淳哉の恋とともに、青春の一ページが終つた。

41期

We
are

練習時間、設備、そして受験——さまざまな制約に真正面から挑んだ

栄光サッカー部に一石を投じた41期の「変革」

佐藤耕一

毎日授業の終了と同時に下校時間の16時迄行つた。正味1時間程度と時間も短く、1対1や2対2、ミニゲーム等しか行うことが出来ず、内容的には乏しいものとなつたが、他校よりも絶対的に不足している練習量を少しでも補うことが出来た。それから、練習時間と同様に他校よりも絶対的に不足していた実戦経験を補

41期の活動を一言で総括すると「変革」であった。41期は、進学校であるが故に存在する様々な規制の中で、より強いチームを作りたいとの一心から、「全国大会出場」という高い目標に向かい、それ迄のやり方を破棄し改めて栄光サッカー部の在り方を模索し、様々な変革に着手した期であつた。

まず初めに取り掛かったことは、栄光サッカー部の最大の悩みである、練習時間の問題である。練習時間が多ければ多いほど強いチームが出来るとは一概に言ふことは出来ないが、少なくとも当時の練習量では足りないと考え、練習時間の増加を図つた。具体的には、まず、キャラテン会にて部活動の日数の増加を提案したが、学校側の許可を得ることは出来なかつた。そこで、それ迄学校が許可している週2回の部活動以外に行つていなかった練習を、希望者のみではあるが、

想い出の
One
Scene

県大会出場への可能性を残したPK

FW佐藤の右足インサイドから放たれたボールはキーパーの逆を突き、弧を描きながらゴールに吸い込まれていった。

秋の新人戦、地区リーグの第3戦。1敗1分で迎えた栄光は、本大会出場のためには1敗も許されない中、栄光グラウンドで湘南高校と対戦した。前半は、試合開始と同時に厳しいプレッシャーをかけられ、殆どボールを支配されたものの、DF陣の頑張りで1失点で凌ぎ、逆に、前半終了間際に相手GKがファンブルしたところをFW仲が押し込み、同点で終えた。後半になると、相手が中心メンバーの一人を交代させたこともあり、自分達の得意な形で連続して攻撃する時間が作れるようになった。そして、同点のまま迎えた後半も残り僅かの所でPKのチャンスを得、前述のSceneが生まれた。このPKで逆転した栄光は相手の猛攻を凌ぎ切り、2対1で勝利を収めた。

結局、その次の試合でも勝利を收め2勝1敗1分としたが、得失点差で県大会出場権を得られなかつた。しかし、この試合はMF平末が高熱を押しながらフル出場する等チーム一丸となって勝利を得た41期のベストゲームであり、その勝利を決定付けたPKは忘れることが出来ない。

う為、日曜日の練習試合は月に2回迄と学校側の規制はあつたが、許される限り練習合を行つた。更に、諸事情もあれば、実現することは出来なかつたが、フェスティバルへの参加等も検討した。

次に取り掛かったことは、フィジカル面の強化である。現代サッカーにおいては、技術と共に特にフィジカルの強さが

重視されている。しかし、当時の栄光サッカー部には計画的なトレーニングメニューなど存在していなかつた。又、設備の面でも体育館にトレーニングルームはない、筋力トレーニングと言えば、主に対人で行つていた。そこで、体力トレーニングなどは関連する書籍で研究し、練習の中に計画的なトレーニングを導入した。又、キャラテン会を通じて部の予算を大幅に増額し、サッカー部専用のトレーニング器具を購入した。購入した器具は体育館の部室に置き、昼休み等の空き時間を利用して、各自が筋力アップを図るようにした。更に、この予算の増額により改善が図られたのはトレーニング器具のみではなく、ボールの数を増加させたり、ミニゲーム用のゴールを購入する等して練習環境の向上も図つた。

最後に、もう一つ大きな変革をもたらしたもののが、3年の夏迄部活動を続けた選手が3名もいたことである。サッカー部だけに限つたことではないが、当時の栄光の部活動では春のインターハイ予選が終わると殆どの3年生が引退し、大学へ進む者が常であつた。前年の40

佐藤耕一 (FW)
矢向謙太郎 (DF)
石渡英敬 (GK)
阿部公祐 (DF)
相原佳之 (DF)
岩瀬寛治 (MF)
内山宗人 (GK)
小貫元治 (MF)
熊倉裕輔 (MF)
小林正泰 (FW)
河野智彦 (DF)
立澤嘉治 (DF)
出口隆明 (MF)
長野博司 (DF)
長浜憲 (DF)
西村直記 (MF)
橋本健太 (DF)
平末健太郎 (MF)
淵上周平 (DF)
松尾素一 (DF)
吉田幸生 (DF)

1991年の世相
1~2月 湾岸戦争
5月 ユーゴスラビア、内戦開始
12月 ソ連消滅



試合後の集合写真（全国高校総体神奈川県予選 対横浜商業高校）



コーナーキックのチャンス（同 対横浜商業高校）



ベンチへ戻るイレブン（同 対横浜商業高校）

主な戦績

全国高校選手権 2回戦敗退
神奈川県新人戦 湘南地区予選リーグ敗退（2勝1敗1分）
湘南地区大会 1回戦敗退
全国高校総体神奈川県予選 2回戦敗退

期の場合も、春のインターハイが終了すると同時に全員が引退した。しかし、41期は各自がそれぞれ悩み、考えた結果、チームにとって戦力的にプラスになるだけではなく、精神的な面からもプラスになることが多かった。そして、何より、自分のやりたいことを最後迄やり遂げる姿、サッカーに対して完全燃焼する姿は後輩達に何かを残すことが出来た。

改めて41期の主な戦績を振り返ってみると、選手権、新人戦、湘南地区大会、インターハイと大した成績は残せなかつた。しかし、練習試合を含めても中堅校には負けることは殆どなくなり、栄光サッカー部としての底力は引き上げられたのではないかと思う。勿論、今振り返ってみると、知識や経験の不足もあり、適切な練習方法ではなかつたし、戦術なども未熟であった。また、練習時間の増加やフィジカル面の強化も目に見える成果としては現れなかつた。しかし、41期は当時の栄光サッカー部に一石を投じ、ほんの僅かではあるかもしれないが、「変革」をもたらすことが出来たと思う。

We are 42 期

葛藤の中での勝たないとダメだ」ということを学んだ六年間

いま思つて

小林 信

には結びつかない。トラップの技術
の未熟さ……」

(一九九二年九月十六日)

「シュート練習は集中力が必要。特に最
初のワントラップに神経をつかうべき」

(一九九三年一月十四日)

卒業して八年。ひさしぶりにサッカー
部の仲間に会うと、六年間を共にした掲
ぎ無さを嬉しく思うと同時に、ある種の
居心地の悪さも感じてしまう。一言でい
えば「私が間違つておりました」と土下
座してしまいたいような誘惑にかられる
のである。

デタラメだったなあ、と思うのだ。口
では「勝ちたい、勝つぞ」と言う
くらいなら、はじめから何も言わない方
がずっとマシだということにどうして気
づかなかつたのだろう。

やけに必死だったことは確かだ。「サッ
カーパー活動記録」と題した私のノートに
は、リクツっぽくなんやかんや書かれて
いる。いくつか紹介すると、
「・キープゲームはバスが難すぎる！
・ベースにボールがでてからの第三
者のフォローが遅い

「考える力」

酒に酔って高校時代のサッカーを思い
返してみる。

思い出されるサッカーは常に楽しいものであるが、印象
に残るワン・シーンというものはない。それは自分が何も
考えずにプレーしていたからだろうか？

近年の日本サッカーの中軸である中田英寿は、高校時代
ユース代表に選ばれたとはいえ、それ程目立つ選手ではな
かったそうである。むしろチームの中心は、足元のテクニ
ックに優れた別のプレーヤーであった。しかしその後の彼
の活躍は日本の誰もが知るところである。彼はこの成長の
原因を、人一倍恵まれた「考える力」だという。

自分のプレーをイメージし、そのイメージに適う自分を
創造する。そのために自分に必要な鍛錬を課す。この「考
える力」をスポーツ・ドクターの辻秀一（栄光28期）は
「EQ (emotional quotient)」と呼び、この「EQ」の欠如こそ
が「日本の体育会系競技者」が世界に追いつかない一因
である、と唱えている。(The EIKO Alumni 56、2001/10
/1より)

自分の高校サッカーを振り返ると、そんな日本の国民性
に行き当たる。それもこれも現在の自分への反省からだろ
うか。

(小林記)

・バスの質の向上→トラップからバス
までの一連の動作・トラップが乱れ
ればバスも乱れる

・決定力の強化 罰ゲームも考える。
目標に満たない分、山回り」

前年の指示と、試合後の寸評も書かれてい
る。今読み返すと、なるほどと思わせる

真剣ではあつたし、それなりに考えて
もいるようなのに、読むものに（かつて
それを書いた当人にさえ）それが伝わら
ない。キツい言い方かもしれないがこの
ノートから伝わってくるのは、「滑稽さ」
というのが一番近いような気がする。

なぜだろう。読みながら、ようやく思
い至つたのは、そこに書かれていること
が、「目標」や「課題」とは名ばかりの、
単なる「現状追認」にすぎないから、と
いうことだった。書かれていることは決
して間違つてはいない。だがそれだけな
のだ。

あの頃の自分に、欠けていたのは「勝
つために何をすべきか」という発想だっ
た。チームのうちの何人かは、私のそ
ういうところに苛立つた。私は私で「こん
なにやつてるとナゼ」と苛立つた。デ
タラメだったなあ、というのはそういう
ことだ。筋トレの必要性を執拗に説いた
彼は正しかった。勝つために準備すると
いうのは、つまりそういうことなのだ。

會田武司
浅尾亮平
石田直
伊藤秀倫
音澤信行
小林信
杉田一真
杉野聰
仲俊治
平山貴邦
廣瀬卓也
正木俊雄
正田泰基
松井拓郎
柳岡正起
山岸健太
山田剛史
若月一泰

1992年の世相

8月 中韓国交樹立
9月 米スペースシャトル・エンデバー、初の日本人宇宙飛行士・毛利さん搭乗



「華々しい勝利」も共有した仲間たち

「最近チーム内に不協和音あり。注意する必要あり」
 （一月九日）

こういうコメントを読むと、あの頃に戻つて、どういうことが起つていたのか自分に教えてあげたい気分になる。

今思い出して一番不思議に思うことは、対戦相手によって意識的に戦い方を変えた記憶がほとんどないことである。相手が本当に強くて、それでもなお「勝ちたい」と望むなら、極端な話、敵陣に一人残し、残りの十人でペナルティエリアに入つて守りに守つて、相手を寄せ、かかるのちに速攻を仕掛ける、というゲームプランだつてありえただろう。だがその程度の作戦さえ立てずに試合に臨んでは負けを重ねていたのだ。

「自分たちのサッカーサエやれば勝てる」という言葉が流行つていた。単なる無策を覆い隠すのに、これほど都合の良い言葉はない。

近年の日本代表、というよりその回りのスポーツマスコミの論調を見ていて、一番私が苛立つのはその「善戦賛美体质」である。「王者フランスに0-1の敗戦は立派」といいきる空気、それはあの頃のもしかすると今も? 荣光に蔓延しているものと非常に似通つているような気がする。本来「善い戦い」のみを意味するはずの「善戦」なる言葉が、敗北の場合にのみつかわれるという現状に暗澹たる気持ちになる。

「善戦から得るものなんてなにひとつない。まったくゼロだ」ということを、六年間かけて知つたこと。それが皮肉でなく、私にとつての部活の最大の成果だつた。勝たないとだめだ、ということを本当の意味で、心底からわかっている人は世の中で意外に少ないものだ。

やけに暗いトーンになつてしまつた。

でもあの六年を振り返つて、私にとつて本当に書くべきことはこういうことだかをすればよかつた」と考えることさえあるのだ（恐らくそういう人は多いだろうが）。勘弁していただきたい。

たまに会つてあの頃の話になると「弱かつたよなあ」とお互に苦笑するのが常だが、例のノートを読み返してみると、意外と華々しい勝利もあるので、口直しに記録しておこうかと思う。

*

1992・8・7

高校選手権予選

6-0

科学技術学園

得点者（石田4、仲1、佐藤1）

1992・11・22

練習試合

6-1

聖光学園

横浜

（正木3、杉野2、仲2、石田、長澤）

練習試合

10-0

慶應湘南藤沢

（正木4、杉野2、仲2、石田、長澤）

練習試合

1-0

（四竜2、塩野）

1993・4・25

練習試合

3-0

横須賀学院

（仲、山田、四竜）

（四竜2、塩野）

（四竜2、塩野）

（四竜2、塩野）

（四竜2、塩野）

（四竜2、塩野）

（四竜2、塩野）

（四竜2、塩野）

（四竜2、塩野）

We are 43 月

ユニークプレーヤー揃いで、卒業後も多くがプレー続行

「43期を彩つた プレーヤーたち」

小林達男

团结力が強く、しかも練習熱心だった上下の学年と比べると、43期はやや見劣りしてしまう学年だったかもしれない。

入部当初こそ30名弱と「豊作」の年ではあつたが、途中、高校へ進学するのを機に、主将・副将をはじめとする多くの部員の転部により部員数は半減してしまった。そのせいか、同期で切磋琢磨、というよりも、各自のプレーを尊重しあう雰囲気の中で、ユニークなプレーヤーが揃う学年となつた。

練習への取り組み方については、随分と個人差があつたものの、皆サッカー小僧である点は同じで、Jリーグの発足やアメリカW杯では一緒になつて熱狂し、様々な形でサッカーに関わっている。

以下、最後まで残つたメンバーを紹介

したい。

*

沓澤伯人 主将。変幻自在の「くるくる

フェイント」で相手DFを翻弄する一方、ときにユニークすぎる独自のサッカー論でチームメイトを翻弄することもしばしば。抜群の持久力でいつも最後までピッチの上でチームを支えた。

塩野雄太 副将。同期随一のテクニシャン、卓越した戦術眼と確かな技術で後輩の信頼も厚かった。長身を生かしたダイナミックな突破はチームに幾度もチャンスをもたらした。現在も旭川医大サッカーチームで活躍中。

牧野慶博 早くからその才能を上級生に認められていた点取り屋。チーム一の俊足と安定した下半身から繰り出される鋭いシュートが武器で、苦しい時にはいつも彼の足元にボールが集められた。

永松弘至 センス溢れる抜群のセービングと、接触プレーを恐れない果敢な飛び出しで1対1やPKを幾度となく止め、チームをピンチから救つた。

小林達男 左足の技術は確かなMF。左サイドから鋭いセンタリングでゴールシ

ーンを演出した。後輩の指導にも熱心で多くの後輩に慕われた。現在は東京都社会人リーグで活躍中。

花水 康 高さと強さを兼ね備えたD

F。入部当初よりDFラインを支え続けた。目が細く温厚な表情の奥では激しい闘争心を燃やし、相手プレーヤーを負傷退場に追い込むこともあつたほど。

中込 悠 遅咲きのマルチプレーヤー。

入部当初より練習の虫であつたが、高校へ進学した頃から鋭い観察力に身体能力が追いつき、クレバーナプレーでチームのリズムをコントロールした。現在も東北大医学部サッカー部で活躍中。

平井健太 入部時は初心者だったが高校でGKからDFに転向した後、頭角を現した。スピードこそないものの、鋭い読みでFWを封じ込めた。

榎本達也 長距離走でその真価を發揮した

岩崎栄介 足技こそないものの、マンマ

に相手校のエースを相手に汚れ役をこなした。

飯島光晴 独自のリズムをもつドリブル

とパスは、時に味方さえ欺いてしまうほど。視野が広く、常にバランスを考えた。目が細く温厚な表情の奥では激しい闘争心を燃やし、相手プレーヤーを負傷退場に追い込むこともあつたほど。

桧山 啓 同期のムードメーカー的存在として、持ち前の明るさと話術でグラン

ドの内外を問わずチームを盛り上げた。努力家でもあり、自主参加の朝練や昼練時には必ず彼の姿があつた。

古谷直之 中学時代はゴールマウスを守っていたが、高校ではフィールドプレー

ヤーにコンバート。元GKならではのロングキックはピカ一。

斎 大地 高2の頃から休み時間に高校校庭で小さいカラーボールを蹴り合う学生チームのコーチも務めている。

榎本達也 長距離走でその真価を發揮した

岩崎栄介 足技こそないものの、マンマ

1993年の世相	
Jリーグ開幕	
6月 皇太子徳仁殿下、小和田雅子さんとご成婚	
7月 北海道南西沖地震	
10月 「ドーハの悲劇」	



高校時代の43期中心チーム



Jリーグ発足でさらに爛られたサッカー小僧たち

★懐しの『DASH』より

(つとに勇猛をもつて知られる10期・
宮杉氏のサッカーとの出会い)

中学2年生の作文 その2●宮杉 武

ぼくが蹴球部に入ったのは二年になつてからである。一年の三学期のある土曜日、家に帰る途中蹴球の練習を見ていて急に入りたくなつた。それ以来蹴球に興味を持ちはじめた。二年になつて最初の練習の日、部室がどこにあるのか知らなかつたので一人ポツンとグランドを行つトレパンにはきかえた。グランドの片すみで一人の上級生が新しく入つたものを見えていたので、ぼくもそこにとんでいった。その上級生はとても親切だった。最初にサイドキックを教えてもらつた。なかなかうまくいかない。でも一生懸命にやつたので少しはうまくいった。休みながら上級生の練習を見ているとすごい勢いでボールを蹴つていた。「ぼくもあんなにうまくくれたらいいなあ」と思った。その日は火曜だったので少しの練習で終つた。帰りながらいろいろ考えた。たつた一回の練習しかしていないのに蹴球部に入つてほんとによかつたと思つた。

44 甘期

網野泰寛
石井宏志
磯野信太郎
糸井泰志
岩室毅
梅田慎也
金本大
神野雄年
神野裕行
佐野淳一
澤野憲太郎
四竈庸祐
篠崎広一郎
須田忠寛
酢谷祐輔
皇俊之
塙田俊史
長澤俊和
西脇義晴
馬場勝尚
牧田崇臣
増山大史
南武郎
南智行
湯本崇
和田健太郎

本当に「勝つ」ために行動できたか？今も自問する

僕にとつての 栄光学園サッカー部

糸井泰志

1995年5月5日、僕はインターハイ予選の二回戦を戦っていた。3点をリードされ追いつくために必死に戦つてしまふが、終了のホイップスルが鳴つても、自分が考えていたほどの脱力感は得られなかつた。正直、「こんなもんだ」という気持ちだつたかもしれない。そんな自分にがつかりしつつも、8月の選手権予選で借りりを返そなどという気持ちは起こらず、僕は栄光学園のサッカー部を引退した。

振り返つてみると、中高6年間のサッカー部生活は、「自分で限界をつくつてしまつた」ものだつた。進学校でもあり、週2回しか正式な活動は行えない状況は、ある意味で都合のよい言い訳の材料になつていて。自分で勝手に線を引き、可能性をつぶしていたのではないかと思ふ。本当に「勝つ」ために行動できたかといえばNOだつた。

振り返つてみると、中高6年間のサッカー部生活は、「自分で限界をつくつてしまつた」ものだつた。進学校でもあり、週2回しか正式な活動は行えない状況は、ある意味で都合のよい言い訳の材料になつていて。自分で勝手に線を引き、可能性をつぶしていたのではないかと思ふ。本当に「勝つ」ために行動できたかといえばNOだつた。

もちろん、栄光学園で部活動をすることがある。 「勝つために、限られた時間に最善をつくすのか」それとも、「そのスポーツを好きな人が集まつて、競技を楽しむことを目的にするのか」。僕は当

時、結局この問題から目を背け、中途半端な状況のまままでいた。

そういうことがあり、大学に入学した際、僕は「勝つために最善をつくしていいる」と感じたアメリカンフットボール部に入った。中学・高校でこれといったことも成し遂げられず、そのまま平凡な学生生活を送ることが怖かったのだと思う。僕にとっては、結局、自分を突き動かしていたものは「恐れ」だった。大学時代は、中高時代に比べて「恐れ」の度合いが強かつた分、また、まわりの環境に刺激を受けた分、自分の限界を少しは大きくできたと思う。

メジャーリーグで活躍している長谷川滋利が自分の体験を語った。「適者生存」という本のなかに、人間のメンタル状態を4種類に分類したものがあつた。そこで、僕は自分をどのメンタル状態に分類されるかを考えた。自分を「無」として扱うのが、最も適切だと思った。しかし、自分を「無」として扱うことはできない。なぜなら、自分を「無」として扱うことは、自分自身を「無」として扱うことと同じだからだ。

とにかく自分を「無」として扱うことはできない。そこで、自分を「無」として扱うことは、自分自身を「無」として扱うことと同じだからだ。

(2) 恐れ
(3) 怒り
(4) 無気力

「無」というのは、勝負に集中して無の境地に入ってしまうこと。「恐れ」これは失敗に対する恐怖、それが人間の強いモチベーションになることを指す。環境になれすぎて「恐れ」を持つことが難しくなつた段階では、できないことに関しても、「怒り」が及ぶようになるという。

何か行動を起こすとき、きっかけは「恐れ」でかまわないと僕は思う。それを上回るモチベーションを加えながら「最善をつくす」ことがで

ストをつくせば「自分の殻を破ることができるのではないか」。

「能力と実力は違う」……サッカー部の先輩の言葉だ。僕にとつてとても大切な言葉もある。「殻を破つて能力をフルに発揮するか」それとも、「殻に閉じこもつて能力の半分も発揮できずに終わるか」。栄光学園でサッカーをした6年間は、こんなことを考えるきっかけを与えてくれた。

大きな成果を残すことはできなかつたが、現在の自分の方向性を定めた貴重な経験となつている。

主な戦績

中学2年 市内新人戦
91.11.3 栄光 0—6 岩瀬 ●
91.11.3 栄光 0—8 深沢 ●

中学3年 夏季市内大会
92.7.11 栄光 1—5 深沢 ●
92.7.11 栄光 2—2 大船 ●

高校2年 選手権予選
94.8.6 栄光 4—3 相模工技 ○ ●
94.8.7 栄光 1—4 南 ●

高校2年 新人戦
94.10.2 栄光 1—2 大清水 ●
94.10.9 栄光 0—3 湘南工大附 ●
94.11.6 栄光 0—1 深沢 ●

高校3年 インターハイ予選
95.5.3 栄光 2—1 厚木東 ○ ●
95.5.5 栄光 0—3 希望ヶ丘 ○ ●

1994年の世相

7月 米スペースシャトル・コロンビア、初の日本人女性宇宙飛行士・向井さん搭乗
7月 北朝鮮、金日成主席没
大江健三郎、ノーベル文学賞受賞
W杯第15回アメリカ大会、ブラジル優勝



大世帯だった高校時代



お調子者が多くかった？中学時代

We are 45期

中1新入部当時は30余名、高3引退時は10余名。そのジレンマに悩んだ

五年前、十年前

林 薫平

私が栄光学園サッカー部を引退してから、ちょうど5年になる。このたび四十五期サッカー部を代表して本誌に一文を寄せるに至ったのだが、現役時代のことを思い起こしてみて、はたと考えてしまった。早い話、私たちの場合、引退の周辺の時期を回想することと、さらに五年を遡って入部当初のことを思い出すことでは、全く異なるシーンが浮かんでくるからだ。

中一の新入部員だった頃、私の記憶では、我々の学年の部員数は三十余名を数えていた。ところが、最終的に高校三年の五月の公式戦にメンバーとして参加した部員は、十名を僅かに上回るくらいに減つてしまっていた。

したがつて同期部員がサッカー部といふものを、當時どう見ていたか、あるいは現在どう見ているかということについて弁するのであれば、私は、少なくとも前者の、つまり十年前のサッカー少年た

ちの立場から書き始める必要があるだろう。

アマチュア・サッカーでは「楽しむこと」と「勝つこと」のジレンマがしばしば問題になるが、我々の場合もまさにそうしたジレンマと無縁ではなかつたと思う。

前者を優先させ過ぎると部活動全体が

目標を失い、良し悪しはともかく昼休みの腹ごなしの運動と同じものになってしまふかも知れない。部活動というものを、

学業に差し障らない限りの暇つぶしといふことではなく、勉学と並び立つ学園生活の重要な一部と考へるならば、そうではなく、ある種の目標が設定されて然るべきである。栄光学園のサッカー部も

そのような意識をもつてやつていたよう

に思う。

例年のごとく、中学二年までは我々もふたつ上の先輩の指導の下に練習や試合を行つていて。上記の観点から毎回のように体力トレーニングや基礎練習が課せられたが、その後に必ず用意されているミニゲームが楽しみでみな不平を言ひながらも明るくやつていた。なにより、

少しづつ上達する過程を少年らしく喜んでいたような気がする。練習試合にしても、鎌倉市内のチームをいくつも呼んで、全員がへとへとなるまで試合をした。

思い出の中で私が美化している部分があるかも知れないが、中学時代の私たちには、「勝つこと」を目標に据えながらも、「楽しみながら」仲良くボールを蹴つていた。

学年が上がって行き、高校に入る頃にもなると、我々の意識の中で「勝つこと」

がある種の深刻味を帯びていったようだ。ジレンマはもはや存在せず、先輩たちの手によつて部活動全体が目的意識を持つて運営されていた。

荒牧嗣夫 (D F)
池田 肇 (M F)
伊藤洋介 (F W)
井上謙一 (F W)
大江健蔵 (D F)
岡田良明 (M F)
小田剛史 (D F)
嘉松 直 (F W)
川本真敬 (F W)
高 蓮浩 (D F)
篠原秀太 (M F)
中所昌司 (M F)
坪井淳一 (D F)
野一色裕 (M F)
林 薫平 (M F)
村山敦彦 (G K)
吉岡宏朗 (M F)
吉岡 優 (M F)
和佐野浩一郎 (G K)

1995年の世相

1月 阪神・淡路大震災

3月 地下鉄サリン事件



高校時代の45期中心チーム

ら能力の高いプレイヤーが選ばれ、多くの場合、そのメンバーは固定的であることが求められた。さらに同様の必要性から、どうしても普段からある程度そのメンバーだけで実戦的な練習をする時間を取ることになり、「レギュラー組」の中で結束が強くなり過ぎていった。

これは当然、その他のメンバーたちからすれば面白い状況ではなく、多くの場合、部活動から気持ちが離れてしまう大きな原因となつていつただろうと思うのである。

私はこの機会に、サッカー部の「栄光」とは何だろかと問いかざるを得ない。

高校時代、年に何度かの公式戦を目標に頼もし仲間とともに頑張った日々の記憶は、いまだ胸を焦がすほど熱い。しかし私は、それよりもずっと遠い昔、真夏の太陽に灼かれた砂や、土砂降りの空や、池のような茶色い水たまりや、毎回お揃いの灰色ジャージを着てボールを蹴っていた、あのサッカー少年たちの姿もまた、忘れることができないのである。

確かにることは、初めにいた仲間のうち、実際に多くの人が途中で部活動から離れていかなければならなかつたということである。そんな中で、私は最後まで中心的なメンバーとして残つた。しかし、たつたそれだけのことに胸を張ることができるものだろうか。それが自分にとってそんなに素晴らしいことであつたとするなら、同じような体験を共にしたいと望む仲間からそれを奪う権利を、誰が持つていた

というのか。

*

高三の五月にインターハイ予選を敗退して、それまで残つていた仲間のほとんどが引退を決めたとき、私ともうひとりは、夏までやることにした。

ふたりともそれまでと変わりなく部活動を受けたので、周囲の友人たちは心配したり羨ましがつたり大変だったことに思つ。結局、八月の上旬に選手権予選に敗退したため、私たちふたりは無事(?)に引退して、九月からは部活動のない生活をすることになった。

栄光学園でその最後の学期が始まったときに私の胸にあつたのは、サッカーを眞面目にやることのなくなつた寂寥感よりもしろ、中学以来だんだん離れていた仲間と久しうぶりに「一緒に」なつたこと、ささやかな喜びだった。

みんなでやる昼休みの他愛のないサッカーは、まるで中一のときのそれみたいに感じられ、私に「おかえり」と言つているようだつた。

